

称号及び氏名	博士（工学） 伊津美 孝子
学位授与の日付	2017年9月25日
論文名	「中間看護管理者の看護管理情報活用力向上のための研修プログラムのデザインと評価に関する研究」
論文審査委員	主査 真嶋 由貴恵 副査 泉 正夫 副査 本多 克宏

論文要旨

近年の医療現場は、DPC(Diagnosis Procedure Combination：診断群分類別包括制度)の導入や地域包括支援システムの推進により、入院患者の在院日数短縮化の促進、在宅医療重視となり、医療や介護が「病院完結型から地域完結型」へと移行しつつある。そして同時に患者を取り巻く多くの情報も病院から地域へとシフトされ、情報の共有化が加速している。

2010年内閣府IT戦略本部の報告においては、「シームレスな地域医療連携の実現」を目指すためには、「病院でのIT化、電子カルテの導入が必須となる。」とし、病院における電子カルテの導入率は加速の一途をたどっている。2014年の厚生労働省の報告では、一般病院34.2%(病床数400床以上77.5%，200-399床未満で50.9%，200床未満24.2%)となった。

今後、医療現場の電子化が進展する中、看護実践において、多種多様なデータを収集、整理し、活用できる情報としてまとめることが看護の質を維持・向上するための鍵といわれている。しかし、看護実践単位の責任者である中間看護管理者(以下、管理者)は、情報教育を受けている者が多くないことから、ICT機器への苦手意識や適切な情報収集手段の把握不足があることが課題となっている。

そこで本研究では、管理者の看護管理情報活用力の現状と教育的課題を明らかにした上で、工学的手法(eラーニング)を活用した看護管理情報活用力向上のための研修プログラムをデザインし、研修後の評価と今後の課題を明らかにすることを目的とする。本研究ではⅢ期に分け、以下6つの点から研究を進めた。各期の末尾に3章以降の該当する章を記載している。

第Ⅰ期管理者の看護管理情報活用力の現状と課題（第3章）

1. 管理者の看護情報活用力の現状と課題
2. 情報活用のハイパフォーマ管理者の看護情報活用力の現状と課題

第Ⅱ期看護管理情報活用力向上のための研修プログラムのデザイン（第4章）

3. 管理者の看護管理情報活用力評価尺度の開発
4. ワークショップ型研修の実施と成果
5. eラーニング型研修の実施と成果

第Ⅲ期看護管理情報活用力の変化と課題（第5章）

6. ブレンディッド型研修による看護管理情報活用力の変化

第2章では、本研究の動機付けとなった全国S系列病院の1つであるI急性期病院(病床数315床)において、eラーニングで実践を行った「新人看護師研修プログラム」の概要と管理者の活用状況について述べる。実践した結果として、管理者はeラーニングへのアクセスは行っていたが、指導コメントを書き込んだ者は2割程度と少なく、十分な活用がなされていなかった。その理由として、ただ単に業務が繁忙で書き込む時間が十分に取れなかっただけでなく、「自宅からのアクセス方法がわからなかった」、「コメントの入力方法や機能の使用方法がわからなかった」など、ICTに対する知識不足やそれら機器操作の不慣れからくる苦手意識が、情報化を進めるうえでの管理者の大きな課題であることが示唆された。

第3章では、まず第2章の結果を踏まえ、第1節で「管理者の看護管理情報活用力」の現状を把握することを目的に行った質問紙調査の結果について述べる。調査対象は、日本看護協会が主催する認定看護管理者教育課程研修受講者116名で、その結果、ほとんどの管理者は情報活用力の必要性については認識しているが、臨床の看護実践現場の問題を解決するためのデータ収集、分析に苦慮しており、ICTを十分使いこなせていない現状が明らかとなった。現場での実践ができるよう、情報機器の苦手意識を克服するための方略が課題となった【調査1】。

また第2節では、看護実践における情報活用力の要素を明らかにするために、4施設の看護部長から推薦を受けたハイパフォーマ管理者(以下、ハイパフォーマ)5名を対象に、インタビュー調査を行った結果について述べる。

ハイパフォーマのICTスキルは高く、主体的に情報活用に取り組んでいたが、ハイパフォーマでさえも、「看護管理の視点から必要な情報とは何か」、「取り扱う情報から何を読み取ればよいのか」などに苦慮していた。また、学習ニーズは非常に高いにもか

かわらず、施設内における学習環境や管理者の教育システムが十分とはいえないなど、今後の教育的課題が明らかになった【調査2】。

第4章第1節では、第3章で行った各調査結果をもとに開発した管理者の看護管理情報活用力を評価するための「尺度」について述べる。この看護管理情報活用力尺度は、【第1因子】「安全性スキル」、【第2因子】「情報化スキル」、【第3因子】「基礎的知識」、【第4因子】「情報共有」の4因子で構成されていた。尺度の信頼性は、20項目のCronbachの α 係数が、0.92、【第1因子】0.86、【第2因子】0.82、【第3因子】0.86、第4因子0.64であり、初期の尺度開発としては十分な数値を確保できたと考える。内的整合性については、4つの下位尺度が互いに有意な正の相関を示した。今後はサンプル数を増やし尺度項目の追加など再検討を行ない、整合性の強化をはかる予定である【調査3】。

第2節では、看護管理情報活用力向上のための研修プログラムの一環であるワークショップ型研修について述べる。これは、主に看護管理情報の活用に向けた行動変容を目的としており、管理者の役割課題を主テーマとし、2回コースで実施した。1回目は、自己の役割課題を明確にし、課題達成のために情報をどのように活用するかといった視点で行動を起こすこと（行動変容）を目標とした。2回目は自己の役割課題の達成状況について討議し、各自の行動変容の状況を確認した。

このような役割課題に着目したワークショップ型研修は、管理者の業務プロセスの改善や現場の問題解決活動などについて、それぞれの体験を共有させることにより、当事者意識を常に持ち、主体的参加と討議へとつながった。特に課題達成状況を報告する2回目のワークショップを設定したことにより、1回目で考えた対策は次回開催までの個々の目標設定となり、達成するための具体的方法、行動目標などの活発な討議、行動変容へとつながった【調査4】。

第3節では、eラーニング型研修の実施と成果について述べる。まず、管理者のもつ未達成の役割課題について、eラーニングの教材を作成した。9名の管理者のうちコンテンツを提供するものを学習者A群として定義し、同意の得られた3名に映像教材制作を依頼した。学習者A群の管理者は各自の役割課題を見直し、深く掘り下げ、プレゼンテーションを行う。それを映像教材とし、eラーニングシステムで学習できるようにした。コンテンツ制作に関わっていない他の6名は学習者B群と定義した。管理者9名全員を対象にeラーニング型研修を実施した結果、学習者A群、B群ともに、個々の抱える役割課題を共有し、ともに解決策を検討し役割課題の解決に向けた行動変容を起こすことができた。しかし、eラーニングシステムの能動的かつ活発な使用を促すためには、返信コメントの通知機能や簡単にアクションを起こすことのできる「いいね」ボタン(肯定する意思表示を示すボタン)など、多忙な管理者にとって優しいシステムの機能についても検討する必要があることが明らかになった【調査5】。

第5章では、第4章で開発し実践したワークショップ型とeラーニング型の研修を合わせたものをブレンディッド型の「看護管理情報活用力向上のための研修プログラム」として定義し、その学習効果について述べる。評価には開発した「管理者の看護管理情報活用力尺度」を使用し、研修前、研修3ヶ月後に調査を行い、看護管理情報活用力の変化を明らかにした【調査6】。

その結果、学習者A群、B群ともに、研修後の看護管理情報活用力は、特に【第1因子】「安全スキル」と【第3因子】「基礎的知識」が向上していた。学習者群別にみると、A群は、【第1因子】「安全性スキル」と【第3因子】「基礎的知識」、学習者B群は、【第3因子】「基礎的知識」と【第4因子】「情報共有」が、それぞれ向上していた。学習者A群、B群に共通して、【第3因子】「基礎的知識」が向上していたことは、役割課題を解決するために情報の再収集や分析、発信などを行ったプロセスの中で、情報活用の基礎的知識が向上したと考えられる。

以上の結果から、第2節では、以下2つの特徴をもつ「管理者のための看護管理情報活用力向上のための研修プログラム」を提案する。これにより、臨床現場の忙しい管理者たちが効率よく協働活動を通して研修できると考える。

1. 対象者の実際の課題をテーマにする
管理者の役割課題に着目した
2. ワorkshop型研修【第1段階】とeラーニング型研修【第2段階】を合わせたブレンディッド型研修として実施する

最後に第6章は、本論文のまとめであり、本研究を通して得られた結論と今後の課題について述べる。

審査結果の要旨

本論文では、中間看護管理者の看護管理情報活用力の向上を図るために、臨床現場の実態に即した能力評価尺度とeラーニングを併用した研修プログラムのデザインと評価に関する研究で、以下の成果を得ている。

(1) 臨床における中間看護管理者の看護管理情報活用力の現状と課題を明らかにするために、看護管理情報活用力の実態調査、ハイパフォーマ看護師へのインタビュー調査を行った。その結果、臨床の看護実践現場の問題を解決するためのデータ収集、分析への困難さ、情報機器の苦手意識、高い学習ニーズにもかかわらず、不十分な学習環境や教育システムの教育的課題などを明らかにした。

(2) 看護管理情報活用力を評価することを目的とし、【第1因子】「安全性スキル」、

【第2因子】「情報化スキル」、【第3因子】「基礎的知識」、【第4因子】「情報共有」の4因子で構成された「尺度」を開発した。

(3) 看護管理情報活用力向上を目的とした研修プログラムをデザインし、臨床現場で実践を行った。管理者の役割課題の明確化と看護管理情報の活用に向けた行動変容を目的としたワークショップ型研修では、管理者の業務プロセスの改善や現場の問題解決活動など、個々の管理者の体験を共有させることにより、当事者意識の醸成、主体的参加へとつながった。特に課題達成状況を報告する回を設定したことにより、考えた対策は次回開催までの目標となり、行動変容へとつながることを明らかにした。さらに、継続した情報活用力の向上を図るために、eラーニングシステムを活用した研修を行った。厳密な評価を行うために、学習者を教材コンテンツを提供する群（学習者A群）とコンテンツ制作に関わっていない他の群（学習者B群）とに分けて定義した。その結果、学習者A群、B群ともに、看護管理情報活用力の向上と役割課題の解決に向けた行動変容が確認できた。

以上の諸成果は、中間看護管理者の看護管理情報活用力の現状と課題に即した提案であり、その結果は現場教育において有益な情報を提供しており、本分野の学術的・実践的な発展に貢献するところ大である。また、申請者が自立して研究活動を行うのに必要な能力と学識を有することを証したものである。